
花鳥風月な方々の日々

まやともまや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花鳥風月な方々の日々

【Nコード】

N0790K

【作者名】

まやともまや

【あらすじ】

姫理や藤森がなんて事ない日々の毎日をすごす。

ゆるゆるの息抜き話…ここに開幕！

日々の1

現代において退屈だと思わない人生を送れるのはほんの一握りだと俺は考えている。

今の俺位の年の奴に将来の夢を聞いても返答は「わからない」やずいぶんと現実じみた夢ばかりで、実際にこの年になってアイドルやらスターやらそんなかないそうも無い夢を語ったところで笑われて終わりだろう。

そしてこの俺、ふじもりまさよし藤森正義はそんな夢物語をすてるのも早く、また、自分の将来がどんな風になるのかなど大体想像がついていた。

中学でやっていた部活も高校では入らず、夢中になったこともなく、ただ授業を受けそして帰る。

そんな退屈な毎日を高校では送る気でいた。

しかしそんな俺の考えは、知り合って半日もたっていない奴に壊されることになった。

そう、すべてのスタートはあの日から・・・

日々の1 プロログから (前書き)

どうも。

この物語は何もありません。

いや：恋愛的是のは若干ありますけど他はないです。

主人公は特殊能力なんか使えませんし、登場人物が宇宙人とかそんなことは一切ありません。

それでも楽しんで貰えたら幸いです。

日々の1 プロログから

四月九日。入学式から一日たった日。

ホームルームの時、クラスでの自己紹介が行われた。

俺はなんて事の無い自己紹介を済ませ、特に他の人の紹介を聞くわけでもなく、この時間が過ぎていった。

事件はここではない。しかし、全てはここだった気がする。

休み時間。一人の女の子が俺に話しかけてきた。

身長は150弱。体系は今風に言えばロリ。顔は幼さは残るもののがなりもてる部類だろう。

そんな女の子が言った。

「あなた、退屈そうね？」

見た目から想像した通りの子供っぽい声が俺に質問をした。

ここで、「そうでもない」みたいな返答をすれば、よかったのかも知れない。

しかし俺は、

「まあな。何でも無い平凡な生活、それを変えるのもいいかなあなんて思ってみたりもしてるな」

と、言った。

この一言がおそらく原因だろう。

この時女子は「ふーん、そう」と言って去っていったが。

同じような質問を他にもしていたのは、後に知ったことである。

次の休み時間、事件は起こった。

先程話しかけてきた女子が俺を呼び出した。

と、言っても手を掴まれ、引っ張られ、強制的にだが。

つれられた場所は生徒玄関付近にある、昼食時には賑わいそうな所。いわゆるコモンスペースだ。

だが、今は誰もいない。

そこで少女はこう言った。

「あなた、私の家来になりなさい。

これは命令よ！」

いや、命令って・・・あんたねえ。

しかし、この体格で威厳を張っている姿が少しかわいい。

「はあ？何言ってるんだよお前」

「お前じゃなくて私は姫理 優花。主の名前くらい覚えなさい。後敬語ね」

いや・・・まだなってないし。なる気ないし。

「ちょっと待て、姫理。その、状況がいまいちの見込めないのだが・・・」

「はあ？あんたばかねえ。

しょうがないから私が説明してあげるわ。何でも聞きなさい！」

これ以上は何もツツコまないでおこう・・・うん、何も。

「じゃあまず、何でいきなり家来になれ！なんだ？」

「あんたが退屈だと思っていたから」

「それだけかよっ！」と早速ツツコミ。

「それだけよ！退屈な毎日を壊してあげるんだからいいでしょ！それでも」

「いや、よくねえし、大体頼んでないし」

「それでも私が、その気になったからもうダメよ！なりなさい！」

「いやいやいや！ダメってあんた！」

退屈を壊すのになんで家来なんだ？普通に何か他の事でも――」

「それじゃ普通すぎるじゃない！」

高い声が俺の言葉を遮った。小さいのにまあ声の大きいこと。

「とにかく！俺はあんたの家来なんてやらないし、それをやる位なら何か別のことを考えるし」

さらに言えばあんたと退屈を壊す気も無い！」

きっぱりと言った俺の目の前の少女はそれを聞いて、

「なんで泣きそうなんだよおおおお！」

俺が悪いみたいじゃないか！」

目をうるうるとさせ今にも泣きそうになっていた。

この子は見た目だけでなく、中身も子供か。

「うっさい！あんたが悪いんでしょ！せっかく誘ったのにそんな事言うから・・・」

本当に泣きそうだ。やばい。とりあえずこの場を打破する方法を・・・！

「わかった！」

「何がよっ！」

「家来にはならない。だけど退屈を壊してくれるのはありがたい。だからこの場はこれで切り上げて次の休み時間までにいい方法を考えておく。」

それでいいか？」

ありがたい。という言葉に反応したのか、姫理は泣き目をやめ、
「しかたないわねえ・・・それでいいから50分の間にしっかり考えるのよ！」

と、また上からの態度で話していた。

なんてこった・・・

その後俺と姫理は教室へと戻り、次の時間へと備えた。

次は委員会決めであったので、考える時間はたくさんあった。

姫理を見てみると、姫理は腕を枕にし、寝ていた。

他も見ろが、すでに談笑の時間となっているものがほとんどであった。

俺の周りは女子に囲まれ話す相手もないが。

と、いうことで俺も睡眠時間としよう。

50分の授業は過ぎていった。

チャイムで目が覚める俺。

休み時間である。

号令が終わると共に来た少女、姫理に再び連れられ、再び同じ場所へ。

クラスの半分くらいが見ていたが、なんだか誤解をされそうだな。元気だなあ。さっきまで寝てたのに・・・

で、彼女は予想通り。

「さ、発表しなさい」

と、言ってきた。

さて、なんと言ったものか・・・

脳をフル回転させ、考えること三秒。

「早くしなさいよ。それとも何？やっぱ家来がいいとか？」

「そんなわけあるかあ！」

とチョップ。もちろん軽く。なんだか小さい子にしかっているようだ。

「何すんのよ！違うなら早く言いなさいよ！これだけ引っ張ってつまらなかつたら許さないわよ！」

と、怒鳴り散らす姫理。

とまあそんなのは置いて、と。考える考える・・・

・・・！これならいける！家来にはならず、うまくいけば楽しくやれるかも知れない方法が・・・あった！

「よし、待たせたな」

「言いなさい」

俺の脳が導き出した最善策は――

「部活を作ろう」

「ぶ・・・かつ？」

作るのが？私たちで？」

「そうだ。一から作るからルールも無い。それは自由。

さらに認められれば部費も出て一石二鳥、仲間も増える。

退屈を壊すにはぴったりだ」

「そうねえ・・・部活か・・・」

考える姿がまた、可愛い。・・・なんだかロリコンと勘違いさ

れそうだ。

「けど、まず部員もいないし顧問もない。活動内容によっては認められないわよ？」

まあそこは俺も悩んだが。

「部員は俺みたいに適当に集めればいい。

それはお前の気に入る奴でいいさ。

活動は適当。部活として認められなくとも、放課後に適当に集まって適当に活動をすればいい。

目的は退屈しのぎだからな」

「そうねえ・・・あんたにしてはまともな意見出てきたわね。以外にも」

あって数時間の奴になんて失礼な女だ。まったく。

「で、どうだ？やるか？」

「そうね、それでいきましよう。

それならまずは部員を集めないかね！」

ふう・・・まずは一難去ったか・・・。

しかし、部活か・・・。大変なことになりそうだ。どうなる事やら。

日々の1 その2 (前書き)

という訳で続きます。

本当はつなげてよかったのですが全部で8000文字ほどになるので分割しました。

なのでもうちょっとだけ第一話です。 m (m

日々の1 その2

三時間目が終わり放課後。

特に入る部活、興味のあることも無いので帰路に着こうとする俺を止める奴がいた。

そう、姫理 優花である。

姫理は俺を呼び出しいつもの場所へと向かった・・・が人がいるために断念。

そうして、俺たちは今、屋上にいる。

今時の学校は自殺だかなんだかがあるとかで屋上は開放されていないと思ったが、意外にもそこは空いていた。

四月とはいえ、太陽を直接食らうここは暑い。

「で？用は何だ？」

「部活についてよ。あんたも部員なんだから何かしなさいよ！」
怒鳴るな。唾が飛ぶ。

「まあ落ち着け。俺が部員集めてもいいのか？」

「ダメ。それは私が厳選する。」

あんたは部室よ！部室を探しなさい！」

「教室でいいだろ？それに出来たら部室くらいもらえるさ」

「それについて私考えたんだけどまず、部活ではなく放課後に適当に集まって何かすることにするわ。」

部活にすると活動を強制されるからやだ」

「じゃあ、なおさら教室でいいじゃないか。すぐに集まれるし、放課後は人もあまり残らない、それじゃ不満か？」

「不満は無いわ。だけどあんたが何もしないことには不満だらけよ！」

身勝手な奴だ・・・ったく。

「で？じゃあ俺は何をすればいいんだ？」

「知らないわよ。自分で考えなさい」

「いや、知らないってねえ・・・じゃあやっぱり今は人集めしかする事が無いが、俺が集めてもいいのか？」

「いやダメ」

即答しやがって・・・俺にどうしろと・・・？。

「じゃやることは無いな、てことで人が集まったらまた呼んでくれ。そしたら来るから」

俺は姫理を置いて屋上から出ていく。

後ろで姫理が待ちなさい！と言っているが、聞こえなかったことにしよう。

・・・結局案外普通な事をしようとしてるな。ま、いっか・・・

次の日、特に姫理に絡まれることもなく、放課となる。

姫理は休み時間になるとすぐに出て行くので絡む暇も無かったのだろう。

しかし、今度は礼が終わると同時に俺の席に来た。

「人を見つけたわ。4組の子」

「見つけたのか？来るのか？つか俺の時みたいに強制的になのか？」

「強制だなんて人聞きの悪い。ちゃんと来るって言ってたわよ」

俺は言っていないのだが。

教室のドアが開く。

「ちわ！来たよ」

「ほら来た」

「本当だ・・・って飛鳥じゃねーか！何してんだ？お前」

「あー！ヒーちゃんだ！ヒーちゃんもこの学校だったんだ？うわゝ以外」

「俺からすれば飛鳥がいる事のほうが意外だし。つかその呼び方がいい加減やめろよ。高校生にもなって恥ずかしい」

「飛鳥はこの高校が近いからきたんだ。遠くにわざわざ行くのめんどくさいし」

「そっか。で、飛鳥が姫理に誘われて来たのか？」

「うん。ヒーちゃんも？」

「いや、俺の場合は強制」

「ふーん、何で？」

「それはだな・・・」

と、言った所で姫理が口を挟む。

「ちよっと！何二人で盛り上がってるのよ！というより二人は知り合いなの？」

「そうだね。飛鳥とヒーちゃんは幼馴染って奴で、家もまあ歩いて1分もかからないところにあるんだけどねー何故か中学は違う中学でさー」

「じゃあ自己紹介的なものは必要ないわね」

「まったく無いよー」

こいつは桜庭 飛鳥。俺の幼馴染。

身長、160前後、顔つきは整っている。自分のことを飛鳥と呼ぶ。考え方は大人なのだが、口調は子供。

これは小学生から変わってないと思う。

家が近くて昔はよく遊んだのだが、中学は違ったので、それからはあまりあわなかった。

けど、散々俺の親から成績がいいと聞かされてきたので頭はいいらしい。

偏差値が65を余裕で超えてるとか。

ちなみにこの高校は55もあれば絶対に入れる。

後、俺の事をヒーちゃんと呼んでいるのは、正義ⅡせいぎⅡヒーロⅡヒーちゃんだからだそうだ。

ひねってるんだかひねってないんだか。

「さてと。これで三人になったわけだけど・・・どうする？」

「どうするっていわれてもな・・・この集まりはお前が集めたんだぞ？」

「じゃあさ、ここはトランプをしよう？私持ってるから」

そういつて飛鳥はバッグからトランプを出す。

「俺はかまわないが」

「私も」

と、言うことで我等が集まり、始めての活動はトランプという事に。

「で、何するの？」

「定番のババ抜きでいいんじゃないの？」

「んじゃ、それでいこー」

飛鳥はなれた手つきでカードを切る。

そして、均等に3等分にして、ゲームスタートっと。

手札にババはない。

「それじゃ私から引くわね、後負けたら自己嫌悪したくなるような罰ゲームがあるから、二人ともまじめにやりなさいよ」

姫理がさらっととんでもない事を言い出した。

「罰ゲーム？自己嫌悪？何するんだ？」

「後でのお楽しみ。負ければわかるわよ」

まけられん・・・

姫理が俺の手札からカードを引く。

引かれたのはスペードの4。姫理はそれを捨てる。

「じゃ、次は俺の番だな」

俺が引いたのはハートのクイーン。手札には無い。

「飛鳥のターン！」

どんなノリだよ。

日々の1 その4

ゲームは進行し、最初にあがったのは飛鳥。

俺のカードは残り3枚、姫理は2枚。

俺がジョーカーを持っていて、現在姫理のターン。

つまりここで姫理にジョーカーを引かせなければならぬのだが・

「さ、おとなしく罰ゲームを受けるがいいわ」

「それはこっちの台詞だ」

なぜなら、俺は絶対に負けない。

理由。姫理はやっぱり幼い。つーかある意味すごい。

ここ何ターンか確認したが、引かせたいカードをちょっと他のより高く持てばそれを引く。

また、顔に出る。

この漫画みたいな二つの要素に気づいた俺が勝つことは容易い。いくぜ！必勝法その一！

俺はジョーカーを他二枚より高く上げ、姫理に向ける。

「ほら、引け」

「ちよっと待ちなさい・・・これね！」

そうして引いたカードは・・・俺の狙い通りジョーカー。

「な・・・何故！」

何故って・・・気づいてないからすごいよなあ。

もはや天然記念物級の弱さ。

「じゃ、俺引くわ」

言いながら俺は、適当にカードに触る。

とたんに姫理の顔が明るくなる。

落胆の後だから余計目立つ。

俺はそれを引くように見せて・・・

隣を引いた。

もちろんカードはジョーカーではない。

「俺の勝ちだな。姫理。それじゃ、罰ゲームカードを引いてもらおうか」

俺の隣にいた飛鳥が耳打ちしてくる。

（ヒーちゃん酷い・・・そこは負けてあげるのが男でしょう？）

（ぐっ・・・しかし、あいつの事だからあの罰ゲームボックスにはきっとゴキブリとか焼くとか、色々あるに違いない！）

（すごい罰・・・まるで某ホラー小説だね・・・）

と、言って飛鳥は姫理に言った。

「今日は初めてだし、罰ゲームはなしでいいよ。ねっヒーちゃん」

「ああ・・・」

何故こんな簡単に承諾したかと言うと、

姫理がまた目が潤み涙を出しそうだからである。

「・・・そうだね！初めてだし罰ゲームはいいよね！」

これで、今日はお開きとなった。

帰り道。

姫理はなんだか用事があるそうで、先帰り。

つー事で飛鳥と帰る事に。

「それにしても姫理ちゃんおもしろいねー

あの子いると退屈しないね、多分」

「そうだなあ・・・けど疲れる」

ははっ、と飛鳥が笑う。

「それは慣れだよ、慣れ」

慣れる時がくるのか・・・？

「まあそれはともかく、俺は飛鳥がこの高校に来ていたことに驚いたがな。」

親は反対しなかったのか？」

「うーん最初は色々言われたけど、最終的には折れた」

「そこまでしていききたい理由があったのか？」

と、聞いた所、

「秘密だよ」

と、言ってきた。まあこれ以上は何も聞くまい。

その後はくだらない中学の事を話し、飛鳥の家の前に着く。

「ばーい、ヒーちゃん。また明日ね」

「おう。また明日」

そっけない別れ。

俺は飛鳥が家に入るのを確認し、歩き出した。

今日の教訓

姫理は負けさせると泣きそうになるので、極力ビリにするのは避ける。

しかし、泣き目の姫理はまた、かわいいので見たいならやるべし。

日々の1 その4 (後書き)

と、言うことで一話が終わりました。

この先もこのような話しかありません。

くだらないですがこの先もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0790k/>

花鳥風月な方々の日々

2011年10月9日21時02分発行